

I　西洋近代　ルネサンスから産業革命へ

1400s~ ルネサンス

それまで：ゴシック的自然的成長の建築の歴史
都市間の交通の発達、芸術家の移動
→形式的抽象化〈様式(=style)〉の発達
→建築は人為的な〈モード(流行)〉となった
→**「問題の発見」→「解決」→「疲弊」→「新しい問題の発見」というサイクルが生まれる**

■ウィトルウィウス『建築書』（ローマ唯一発見された建築本）
→〈オーダー〉定番の発見→ローマ・ギリシャ建築のルネサンス
■ブルネレスキ…遠近法の発見、真円、比例の利用

16 世紀　マニエリスム

maniera= 手法←個性・個人的才覚のもの、という認識
■ラファエロ／ジュリオ・ロマーノ／パラーディオなど
①引用の変形　②規範からの逸脱　③形式の崩壊　④時間の介入
ジュリオ・ロマーノ《パラッツォ・デル・テ》(1535)

16 世紀後期～　バロック

①絵画的（どのようにみえるか）　②巨大化（ジャイアント・オーダーなど）
③量塊性（形体の明確さより大きさ、重さ）　④運動性→楕円が好まれて使用される
ヨハネス・ケプラーの法則群（1619）の発見を追従したのでは
■フランチェスコ・ポッロミーニ《サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ教会》(1641)

歴史的には植民地の広がりなど、「焦点の配置」による拡大が起こる。その意味で礎となった。

18 世紀中期～　新古典主義＝第 2 のルネサンス

ダイナミック・数学的厳密性・楕円の消失
ものを作るよりもものを構想する方に建築家が邁進

17 世紀イギリスの〈啓蒙主義〉→情報公開（百科事典など）と流通の発展→知性の平準化
→それまでの世界をタブラ・ラサ（白紙化）するような考え方→革命へ

■クロード・ニコラス・ルドゥー《ショーの王立製塩工場》(1779)　ユートピア的
■エティエンヌ・ルイ・ブーレー《円錐状の死者の記念堂》(1786)

・建築史の発達

■フィッシャー・フォン・エルラッハ『歴史的建築の構想』(1721) 百科事典的ネタの提供
■マルク＝アントワヌ・ロージェ『建築試論』(1753) 原始の小屋、理念の提出
■ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン『あらゆる種類の建築の比較対照』(1800) スケールによる批判

17 世紀ぐらい～イギリス　折衷主義

様式の取捨選択によるまとめあげる作業 / 交換価値の発生、その運用の重要性が高まる
■ジョン・ソーン《ソーン自邸》(1792~1824)
躯体をフラットにし、均質性、交換可能な世界を基盤に置くことで異質な様式をまとめあげる

17 世紀ぐらい～イギリス　ピクチャレスク

自然美の重視〈サブライム（＝崇高美）〉…astonished するようなスペクタクルなもの、パニック的美
庭の中に古典建築や廃墟を置く→**自然／人工、過去／現在の対比**→フィクション的感觉
■ピラネージ《ローマの景観：フォロ・ロマーノ》(1775)
折衷主義もピクチャレスクも「様式の死」を意識した、現代と似たモードの中の創作なのでは

19 世紀～　産業革命と万国博覧会建築

18 世紀の蒸気機関の発明、実用化→「労働者」の誕生→機械の為の建築／休めればいい家
技術革命による鉄（1780s）や鉄筋コンクリート（1870s~）、ガラスの使用
・万国博覧会での課題
①世界を收容する建築とは？②簡単な建造と解体 new!
→温室の技術を使った《クリスタル・パレス》1855 ロンドン万博　均質な明るい空間
・技術者の栄華　《エッフェル・タワー》　1867 パリ万博

II　モダニズムの極北　20 世紀芸術運動と建築

・〈折衷主義〉→様式の比較基準（ex. 原型の模索、(同一）スケール、透明な光）の探求
→疲弊、様式の消滅→残ったのは基準だけ
・時代は WW1 のタブラ・ラサ（白紙）の中→この中での OS 作りが〈モダニズム〉
・**〈モダニズム〉＝世界に内在する共通の基準をみつけ、それを形体やシステムとして具体化することで未知の社会像に追従しようとして建築運動**

■ミース・ファン・デル・ローエ

・抽象的均質空間の反復による” 神殿” づくり、という超越性がある
《フリードリヒ街のオフィスビル案》(1921)《シーグラムビル》(1958)
シュプレマティズム（絶対主義）
マレーヴィチ（ロシア）などによる、人智を超えた神的なものにむかって抽象表現を極めていく運動
何かの模写である絵ではなく、絵が絵として成立する自律的なものが多い

・建築要素の構成の実験
主に壁をずらし、再構成ことで従来の四角い部屋からの脱却、多様な部屋の連続性を生む
《バルセロナ・パビリオン》(1929)

■アドルフ・ロース

・（無駄な）装飾の否定←ダダイズムと共通する過激さと、周縁国における保存と新規の調停の難しさ
ダダイズム
トリスタン・ツァラがスイスで 1916 年におこす。第一次世界大戦に対する抵抗やそれによってもたらされた虚無を根底思想に持っており、既成の秩序や常識に対する否定、攻撃、破壊を大きな特徴とする

・〈ラウム・プラン〉内外の断絶、各シーンや使い方による官能的内部←ゼンバーの被覆原理

■ル・コルビジェ

（前期）
・近代建築家の運動のスタイルの確立（雑誌の刊行、都市まで考える、CIAM の運営など）
・近代建築の 5 原則←ドミノ理論
・**キュビズム（ピュリスム）**
マレーによる「分解写真」的試みなのでは？つまり「時間差」の表現→《サヴォア邸》(1931)

（後期）
・WW2 後復活した国際主義の中で、グローバルかつ地域的になっていく→**〈ヴァナキュラ建築〉**
《チャンディーガル》(1950~)《ロンシャンの礼拝堂》(1955)
・部材の再統合、ランダムの中の秩序→《ラ・トゥーレット修道院》(1960)

〈未来派〉

イタリア愛国的芸術破壊運動。「テクノロジー」と「都市」を美学の根底に据える。
特徴としてスピード（運動）狂、戦争賛美、女性蔑視
■フィリッポ・トマーゾ・マリネットティ『未来派創立宣言』(1909)
■アントニオ・サンテリア《新都市》(1914) 機械が生み出した（土木的）形態の建築化

〈ロシア構成主義〉

1922~ ソヴィエトでの芸術運動。産業や労働と社会を構成し結び付ける「(芸術)行為」を考える
革命後 10 年ほど先鋭的な活動を国家が許容→揺り戻し（スターリニズム）により活動は縮小
特徴は「SF 的」「重力のなさ」「飛行」「鳥瞰」→宇宙において唯一デザインが有効に残っている
■ウラジーミル・タトリン《第 3 インターナショナル記念塔》(1919)
■エル・リシツキー《レーニン演説台》(1920)《雲の階段》(1925)
■コンスタンチン・メーリニコフ《コロンブス記念塔案》(1929)
■イワン・レオニドフ《レーニン研究所設計案》(1927)

■バックミンスター・フラー

・〈ダイマキシオン〉最小の労力で最大の工科を得ようとするデザイン思考
・〈ジオデシック・ドーム〉通称フラー・ドーム。軍隊やヒッピーに人気だった
・〈宇宙船地球号〉の提唱(1963)
トランセンデンタリズムを背景に、アメリカンユートピア的思想やアイディアを具現化した

III　近代＋日本＋建築

「近代世界システム」の始まり＝〈近代＝モダン〉の始まり　　表裏一体
→国民主義国家「日本」の成立
→**これらを形としてまとめあげる技術、芸術としての「建築」**

〈疑洋風建築〉

18 世紀　木割などを含む建築書の流通。広い建築文化の享受・成熟
溝口林卿『紙上蜃気』(1758) 平内廷臣『矩術新書』(1848)　幾何学化、抽象化
文明開花の時代、近世からの大工たちによる建築群←素晴らしい「みようみまね」だった
ex.《クラーク邸》1872 白いくりがた＝和と洋の融合
伝言ゲーム的” 擬洋建築” のひろがり
①なまこ壁（漆喰による石造りの演出）　②中央の塔屋（燈台＝海に面した異国交流の象徴）
③ペランダ（幕末の居留地における様式住宅へのあこがれ）　④多角形の塔（国内規矩術からの流れ）

様式の模索

1877　工部大学校の創設　西洋建築教育の始まり
■ジョサイア・コンドル　ロンドン出身の折衷主義者、教育者《三菱 1 号館》(1894)
■辰野金吾、妻木頼黄、片山東熊など　東大建築学科 1 期
初期の様式建築のメダイオンから、文化的文脈の浅さ、翻って東宮御所での成熟が見られる
《国会議事堂》(1936) をめぐる問題＝**近代と日本を統合する難しさ**
→最終的に、ヨーロッパの中心を迂回する古代文明の霊廟を起源としたジグラットを用いた
→明治の終わり　**様式デザイン中心の建築から実利とエンジニアリングが求められるように**

統合的時代 1960s

〈モダニズム〉の意識的な理念に基づく建築の提案→経済システムに合ったスピード感と交換性をもつ
■土浦亀城　《自邸》(1935)　■堀口捨巳《岡田邸》(1933)←モダニズムと日本の「併存」
■渡辺仁〈帝冠主義〉　近代建築の上に和風の屋根を冠する　軍国主義、日本性の維持⇔表面的？
混沌を極める中、第二次世界大戦、そして高度経済成長

■丹下健三

・虚のデザイン　・木割と黄金比の融合　・コアの発明　・《東京計画 1960》→〈メタポリズム〉
・《国立代々木競技場》(1964) などオリンピックでの功績　・分散するコア、都市のコア→万博

ポスト丹下 1970s

世界の問題　①個人あるいは小集団と世界の接近　②公害　③世界経済と国内の連動
・アンチモダン、特に機能（関数的）主義いくつかの問題にひとつの解→**いくつかの解決策を与えていく**

・新しい建築家像
■バーナード・ルドルフスキー『建築家なしの建築』(1964)　ヴァナキュラの建築
■スチュアート・プラント『ホール・アース・カタログ』(1968-74) グーグル的ツール引き

〈フォルマリズム（形式主義）〉　使い方、機能あとまわし
■毛綱モン太《反住器》(1972) ■鈴木恂《KIH7004》(1970)
〈セルフエイド〉
■川合健二《自邸》(1966) コルゲートシートの使用　■石山修武《開拓者の家》(1975-86)
〈リージョナリズム〉
■吉阪隆生と U 研究室《大学セミナーハウス》(1965)　→象設計設計集団

→**相応に有効であった解決提案を総称した（してしまった）ものをポストモダニズムと呼ぶ**

クリティカル・グリーンズム（批判的緑化主義）

1970 年代の公害や環境意識→〈グリーンズム緑化主義〉の世界的広がり
①建築を植物で覆う　②全体像の断片化　③コラージュされた芝生、思い思いの活動、庭園的気安さ
⇔**現代日本建築の植物の扱い方に、事物への高い認識水準と独自性があるのでは**
植物と人間をめぐる生死に関係する深さをもつ

■伊東豊雄《中野本町の家》(1976) 人間不可侵の植物の自生
■三分一博志《犬島精錬所美術館》(2008) ピクチャレスクの弱い建築⇔自然と過去の遺物の対比
■藤森照信《東京計画 2107》(2007)《高過庵》(2004) など　人間の生死と外部の関係